北海タイムス
昭和41年11月27日 (日曜日) 小樽

北海タイムズ S.41.11.27 (日)

市の〝じんかい炉〟を卒論に

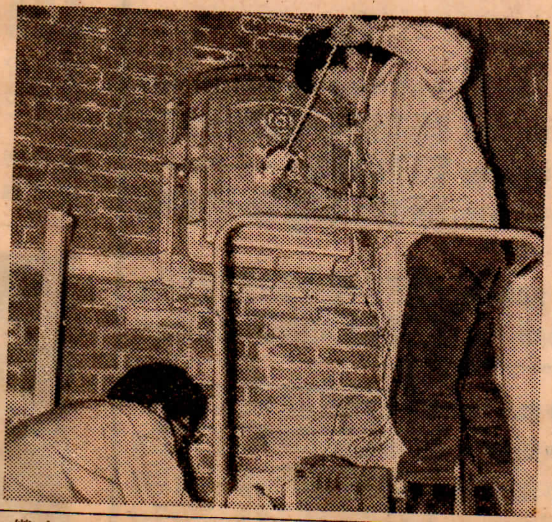
北大工学部の手島、木村さん

経済的熱効率を追究

珍しい試み 市も全面的に協力

『じんかい焼却炉の燃焼特性』というテーマで、昨年十一月に運転を始めたばかりの小樽市じんかい焼却場を卒業論文に取り上げ、経済的な燃焼効率を追究しようという北大生二人が、二十六日から測定調査にかかった。卒論に焼却場を取りあげることも珍しく『りっぱなものにしなければ』と張り切っている。市も焼却場が卒論の題材になるとあって全面的に協力するといっている。

この二人は、北大工学部衛生工学科四年生で環境衛生を専攻する手島肇さん(二二)と、同木村正宏さん(二二)『これまで、毎日の授業と就職試験などに追われ、卒論どころでなかった。就職も内定したし、卒業まで期間もないのできょう二十六日から測定を始めました』と二人は、いっている。大学側から数項目にわたって卒論のテーマを提示されたのが、六月。自分たちの専攻する科目と関連させ取りあげたという〝社会的貢献などと考えられません〟とは、いいながら、持ち込んだ『熱電対温度計』『マノメーター』などの計器を使って盛んにデータ集め。



測定に真剣な手島、木村さん

これまでもメーカーから資料を取り寄せたり、東京・足立区の焼却場を見学した。あいにく札幌には参考になるところはなく、札幌から時間的に近く最新鋭装置を誇る小樽市じんかい焼却場を選んだ。市の焼却場も北大の衛生関係で知られている岡垣教室の指導を受けてつくられたもの。それだけに二人が、焼却場を選定したのも偶然ではなさそう。二人は、測定調査に先だってこの八月に打ち合わせのため来樽、下調べをして準備にかかった。二十六日は、炉内の圧力、排ガスの温度、外界との関係、予熱ガスの温度など、夜八時ごろまで調べた。測定に懸命な二人は『排熱ガスを利用して、焼却場前にロードヒーティングのようなものをつくってはどうか。凍結防止と能力の向上に役立つのではなかろうか。勉強もお留守にできないので来週木曜日にまたくる予定ですが、測定には、四、五回来る。年内に測定を終えて年初めに整理をし、二月二十日ごろまでには仕上げるつもり。小樽のは比較的発熱量が高く、良質だ』と、額に汗をしながら語っていた。

市清掃センターの岩戸三郎所長も『卒論に市の焼却場が取りあげられるとは光栄だ。資料その他で、できる限りの協力をする』と力を入れている。